

サハリン樺太史研究会
2013年度活動報告書

2016年3月31日
サハリン樺太史研究会

—2013 年度活動報告書—

目次

会長あいさつ

活動概要

例会・関連シンポジウム等

研究成果刊行物（付：参考資料 非会員による研究成果刊行物）

研究プロジェクト（付：参考資料 非会員による研究プロジェクト）

サハリン樺太史研究会会則・役員

報告書刊行について

本会は 2008 年 7 月に発足した。その後、例会開催、共同調査実施を重ね、さらに 2010 年には研究会誌を刊行、2011 年より公式 HP を開設し、研究会内外への発信にも力を入れるようになった。2012 年 1 月までに 2010 年度までの報告書刊行を終えたものの、それ以降は諸般の事情により作成が滞っていた。ここに 2011 年度から 2014 年度までの 4 年度分の活動報告書をまとめて刊行することとした。

2011 年度分以降では、参考資料として非会員の研究動向も日本国内限定ではあるものの掲載することとした。このことによって、日本国内のサハリン樺太史研究全体における本会の位置がより明確になろうし、また本報告書によって、完全にまでとはいかないものの、日本国内におけるサハリン樺太史研究の全体的動向を俯瞰することが可能になればと編者として願う。

なお、本報告書記載の情報の部はインターネット上の情報を参照したものであり、若干の不正確さが残っていることがあり得ることをことわっておく。また、会員については本報告書編集時点で本会のメンバーリストに登録している者を指しており、当時は未会員であった場合もあることはご了承いただきたい。

2016 年 3 月 31 日

中山大将

（サハリン樺太史研究会公式HP運営担当者）

—会長あいさつ—

サハリン・樺太は、前近代においては先住民を担い手とした、大陸側から千島列島にいたる海を介した交易ルートの一環であり、近代には日本とロシアの接触地域をなし、両国間で何度も国境線の引き直しと大規模な人口移動が繰り返された特異な歴史を有する島です。

この島の呼称も、幕末までは「北蝦夷地」とよばれ、明治初年から「樺太」とよばれるようになり、全島ロシア領有に変わると「薩哈噠」の3文字が当てられました。日露戦争後の北緯 50 度以南日本領有により、ふたたび「樺太」となり、第二次世界大戦後はサハリンと呼ぶことが一般的となりました。

近年、この島に改めて歴史研究の光を当て、この島の住民が幾世代にも亘って関わった歴史的経験を捉え直そうとする機運が日本、ロシア双方で高まりつつあります。また、日本とロシアとの研究交流は、今世紀に入り、活発に行われるようになりました。たとえば、北海道大学スラブ研究センターとサハリン大学を拠点として、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」第 5 回研究会「サハリン・樺太の歴史」(2004 年 7 月 29 日～30 日)、同第 11 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅰ)」(2005 年 9 月 21 日)、同第 13 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅱ)」(2005 年 12 月 3 日)、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」(2005 年 11 月 1 日～2 日、2006 年 2 月 16 日～17 日)、「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」(2008 年 5 月 6 日～7 日)と幾度も研究会が開催されてきました。そして 2008 年の「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」開催後に、シンポジウム参加者を中心に 2008 年 7 月、サハリン・樺太史研究会が発足しました(初代会長：原暉之北海道大学名誉教授)。

サハリン・樺太史研究会は、これまでの樺太史・サハリン史研究が日本、ロシアにおいて、それぞれ別個に行われてきたことを踏まえ、双方の研究成果を学ぶとともに双方の研究成果の交流、資料保存情報の交流などの研究交流を進め、「一國史」にとらわれないサハリン・樺太史を描くことを目標としています。

本会は札幌を拠点として研究会、シンポジウムを定期的に(年間 5 回程度)開催しております。これら研究会、シンポジウムは参加自由で、どなたでも参加できます。サハリン・樺太史の研究に関心をお持ちの方は、本会事務局にお知らせいただけましたら、案内メールを差し上げます。

2013 年 12 月 17 日

サハリン樺太史研究会会長 白木沢旭児(北海道大学大学院文学研究科教授)

—活動概要—

事務局新体制

発足以来、原暉之会長と今西一副会長に率いられてきた本会は、本年度から世代交代し、新たに白木沢旭児氏が会長に、前事務局長の天野尚樹氏が副会長に、HP運営を担当していた中山大將が事務局長に就任した。また、通常の例会では研究報告と書評会を組み合わせる方式が試みられ、三木理史『移住型植民地樺太の形成』、玄武岩『コリアン・ネットワーク』、舟山廣治編著『樺太庁博物館の歴史』の書評会が行われた。

樺太〈戦後〉史研究の展開

本年度はサハリンの戦後だけではなく、引揚者の戦後までも含んだ樺太の〈戦後〉史研究の展開が著しかった。第28回例会・国際シンポジウム「日ソ戦争後サハリン島・クリル諸島における引揚と移住」では、ロシア側の研究者を招きサハリン戦後史に関する相互検討を実現した。政治的問題をはらむ時期の問題でありながら、円滑で友好的な議論を進めることが出来たのはひとえに本研究会の地道な交流の蓄積ゆえであろう。また、11月には田村将人氏と中山大將が蘭信三氏(上智大学)の共同研究グループの成果として出版された『帝国以後の人の移動』に2篇、年度末には『北海道・東北史研究』には木村由美氏、ジョナサン・ブル氏、それにディン・ユリア氏を加えた3篇、そして『移民研究年報』には中山大將の1篇と、計6篇の〈戦後〉史研究論文が刊行された。

三木理史『移住型植民地樺太の形成』の書評と反響

昨年度に三木理史氏が刊行した『移住型植民地樺太の形成』に対して本会員の天野尚樹氏、原暉之氏、中山大將による書評が学会誌・研究会誌上で発表された(なお、次年度には塩出浩之氏による書評も発表された)。いずれも、樺太の学術的通史として高く評価するとともに、樺太の「植民地」という位置づけに対する議論を提起した。また、本会第25回例会でも合評会を行っており、これら書評の内容にはそこでの議論が反映されている。

サハリン島写真館(Web)開館

兎内勇津流氏は共同研究の成果のひとつとして、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのサイト内の「極東ロシア・シベリア所蔵資料ギャラリー」に「サハリン島写真館」を2014年2月末に開設し、貴重な写真資料などを一般公開した。

中山大將『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』出版

2010年3月に京都大学に提出した博士論文を基に中山大將が著書『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』を刊行した。農業史研究を軸としながらも、これまでの研究では論じられてこなかった樺太におけるナショナル・アイデンティティや文化論、技術思想などまで論じ、樺太史研究の議論の幅を広げた。

—例会・関連シンポジウム等—

■ 第 25 回例会・

日時:2013 年 5 月 25 日

場所:北海道大学人文社会科学総合教育研究棟(W棟)201 教室

研究報告

戦後樺太からの引揚者と北海道……………木村由美(札幌市文化資料室)

合評会:三木理史『移住型植民地樺太の形成』(塙書房、2012 年)

■ 第 26 回例会

日時:2013 年 6 月 20 日

場所:北海道大学スラブ研究センター4 階小会議室

鑑賞検討会:映像資料「樺太の原住民」……………映像提供者:大矢京右(市立函館博物館)

■ 第 27 回例会

日時:2013 年 8 月 26 日

場所:北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W309 室

書評会:玄武岩『コリアン・ネットワーク :メディア・移動の歴史と空間』(北海道大学出版会、2013 年)

評者……………池直美(北海道大学公共政策大学院講師)

評者……………小坂みゆき(北海道大学大学院文学研究科専門研究員)

研究報告:

北洋漁業における自由出漁と対露交渉……………中本健司(北海道大学文学研究科修士課程修了)

第 28 回例会 国際シンポジウム「日ソ戦争後サハリン島・クリル諸島における引揚と移住」

日時:2013 年 10 月 12・13 日

場所:北海道大学人文社会科学総合教育研究棟(W 棟)409 室

第 1 日 12 日

戦後初期における南サハリンおよびカリーニングラード州のソ連移住政策

……………キム・インナ(国立サンクトペテルブルグ中央文書館)

評者……………天野尚樹(北海道大学)

第二次大戦後南サハリンおよびクリル諸島からの朝鮮人帰還問題……………デイン・ユリア(高麗大学校)

評者……………池直美(北海道大学)

ビデオ上映……………「サハリンからの声:北方先住民族の戦後」(制作:藤野知明)

第 2 日 13 日

南サハリンおよびクリル諸島における民政史(1945～1947 年)……………エレナ・サヴェリエヴァ(サハリン州文化局)

評者……………中山大将(北海道大学)

総括ラウンドテーブル

……………キム・インナ、デイン・ユリア、エレナ・サヴェリエヴァ、浅野豊美(中京大学)、田村将人(札幌大学)

エクスカージョン……………小樽市総合博物館「ロシアが見たアイヌ文化」見学

第 29 回例会 博物館と国境標石

日時:2014 年 1 月 25 日

場所:北海道大学人文社会科学総合教育研究棟(W 棟)202 室

書評会:舟山廣治編著『樺太庁博物館の歴史』(北海道北方博物館交流協会、2013 年)

評者……………池田裕子(稚内北星学園大学)評者

評者……………田村将人(札幌大学)

研究報告:

北緯 50 度 国境線に立つ……………相原秀起(北海道新聞社)

—研究成果刊行物—

(五十音順)

■天野尚樹 ロシア極東近現代史・北東アジア国際関係史

【定期刊行物】

天野尚樹「荒澤勝太郎の『誤読』」『樺連情報』760号、2013年8月1日。

天野尚樹「サハリン／樺太：帝国にはさまれた植民地」『函館日口交流史協会会報』35号、2013年12月7日。

天野尚樹「書評 三木理史著『移住型植民地樺太の形成』」『史林』第97巻1号、2014年1月。

ディン ユリア著、天野尚樹訳「戦後処理における未解決の問題：南サハリン朝鮮人の送還問題（1945～1950年）」『北海道・東北史研究』9号、2014年3月31日。

■池田裕子 教育史

【定期刊行物】

池田裕子「樺太で行われた『口演童話』」『樺連情報』767号、2014年3月1日。

■井澗裕 建築史

【定期刊行物】

井澗裕「ヒツジとライオン」『樺連情報』761号、2013年9月1日。

■尾形芳秀 樺太ポーランド人研究

【論文集】

ヤンタ=ポウチンスキ アレクサンデル著、佐光伸一訳、井上紘一、尾形芳秀注釈「樺太のポーランド人たち」北海道大学スラブ研究センター『ピウスツキの仕事：白老における記念碑の除幕に寄せて』海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター、2013年10月20日。

■神長英輔 漁業史

【論文集】

神長英輔「コンブの旅とコンブ革命：ロシア極東、日本列島、中華世界」谷垣真理子ほか編『変容する華南と華人ネットワークの現在』風響社、2014年2月20日。

【定期刊行物】

神長英輔「書評 宇佐美昇三著『蟹工船興亡史』」『図書新聞』3125号、2013年9月7日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■ 木村由美 日本近代史

【定期刊行物】

木村由美 「脱出」という引揚げの方法：樺太から北海道へ』『北海道・東北史研究』9 号、2014 年 3 月 31 日。

■ 鈴木仁 文化史

【定期刊行物】

鈴木仁「樺太庁長官物語その(2)第十三代長官棟居俊一』『樺連情報』757 号、2013 年 5 月 1 日。
鈴木仁「樺太における「郷土読本」編纂の背景』『北海道地域文化研究』6 号、2014 年 3 月。
鈴木仁「日露戦争時のサハリン博物館焼失事件について：日本側の資料から』『北方博物館交流』26 号、2014 年 3 月。

■ 竹野学 経済史

【定期刊行物】

竹野学「1925 年の北樺太引揚げ』『樺連情報』756 号、2013 年 4 月 1 日。

■ 谷本晃久 日本近世史

【定期刊行物】

谷本晃久「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所サハリンアイヌ交易帳簿の研究概報：一九世紀初頭アニワ湾岸地域における交易のすがた』『東京大学史料編纂所研究紀要』24 号、2014 年 3 月。

■田村将人……………アイヌ史

【論文集】

田村将人「サハリン先住民族ウイルタおよびニヴフの戦後・冷戦期の去就：樺太から日本への〈引揚げ〉とソビエト連邦での〈残留〉、そして〈帰国〉」蘭信三編『帝国以後の人の移動：ポストコロニアルとグローバリズムの交錯点』勉誠出版、2013年11月20日。

田村将人「サハリン先住民族の〈引揚げ〉と〈残留〉」蘭信三ほか編『人の移動事典』丸善出版、2013年11月25日。

田村将人「鳥居龍蔵の樺太庁囑託としての一九一二年サハリン調査」ヨーゼフ・クライナー編『日本とはなにか—日本民族学の二〇世紀』東京堂出版、2014年3月30日。

【定期刊行物】

田村将人「樺太アイヌのたどった戦後、そして現在」『樺連情報』763号、2013年11月1日。

ヴィノグラドヴァ タチャナ・イゴレヴナ著、田村将訳「翻訳 ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルグ支部図書室の蔵書の一部としてのサハリン・コレクション」『北海道・東北史研究』9号、2014年3月31日。

■中山大将……………農業社会史

【著書】

中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』京都大学学術出版会、2014年3月31日。

【論文集】

中山大将「サハリン残留日本人：樺太・サハリンからみる東アジアの国民帝国と国民国家そして家族」蘭信三編『帝国以後の人の移動：ポストコロニアルとグローバリズムの交錯点』、2013年11月20日。

中山大将「樺太への人の移動」蘭信三ほか編『人の移動事典』丸善出版、2013年11月25日。

中山大将「残留日本人とは誰か：北東アジアにおける境界と家族」『2013年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』、2014年3月31日。

【定期刊行物】

中山大将「境界を跨ぐサハリン残留日本人・韓人」『Arctic Circle』88号、2013年9月17日。

中山大将「亜寒帯文化」『樺連情報』762号、2013年10月1日。

中山大将「書評 三木理史著『移住型植民地樺太の形成』」『北海道・東北史研究』9号、2014年3月31日。

中山大将「サハリン残留日本人の冷戦期帰国：「再開樺太引揚げ」における帰国者と残留者」『移民研究年報』20号、2014年3月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■ 原暉之 …………… ロシア極東近現代史

【定期刊行物】

原暉之「書評 三木理史著『移住型植民地樺太の形成』」『アジア経済』第 55 巻 1 号、2014 年 3 月。

■ ブル ジョナサン …………… 日本政治史

【定期刊行物】

ブル ジョナサン著、天野尚樹訳「「樺太引揚者」像の創出」『北海道・東北史研究』9 号、2014 年 3 月 31 日。

■ 松村正直 …………… 文学史

【定期刊行物】

松村正直「松村英一と国境線」『短歌往来』2013 年 4,5 月号。

松村正直「北原白秋・吉植庄亮と海豹島」『短歌往来』2013 年 6,7,8 月号。

松村正直「橋本徳壽と冬の樺太」『短歌往来』2013 年 9,10 月号。

松村正直「生田花世と木材パルプ」『短歌往来』2013 年 11,12 月号。

松村正直「石樽千亦と帝国水難救済会」『短歌往来』2014 年 1,2,3 月号。

■ 三木理史 …………… 歴史地理学

【定期刊行物】

三木理史「サハリンで土に還った国宝級の鉄道郵便車」『樺連情報』758 号、2013 年 6 月 1 日。

三木理史「北サハリン保障占領と樺太：仮説の紹介」『樺連情報』764 号、2013 年 12 月 1 日。

参考資料……………非会員による研究成果刊行物

- 【著書】北海道大学スラブ研究センター『ピウスツキの仕事：白老における記念碑の除幕に寄せて』北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター、2013 年 10 月 20 日。
- 【論文集】池田貴夫「引き揚げた人、残された人：樺太引揚者とサハリン残留朝鮮人が残してくれたもの」島村恭則編『引揚者の戦後』新曜社、2013 年 8 月 15 日。
- 【論文集】小川正樹「樺太華僑史試論」谷垣真理子ほか編『変容する華南と華人ネットワークの現在』風響社、2014 年 2 月 20 日。
- 【定期刊行物】ヴァシリューク スヴェトラナ「日ソ・ロ関係におけるサハリン問題と樺太人の役割」『明治大学社会科学研究所年報』53 号、2013 年 12 月 25 日。
- 【定期刊行物】大喜多紀明「2 編の「ボヌンカヨ」物語にみられるストーリー展開と交差対句：浅井タケを話者とする樺太アイヌ口承テキストを題材として」『Polyglossia』26 号、2014 年 3 月。
- 【定期刊行物】小川正人「対雁（ついしかり）学校の歴史：北海道に強制移住させられた樺太アイヌの教育史」『教育學研究』第 80 卷 3 号、2013 年 9 月 30 日。
- 【定期刊行物】齋藤玲子「日本北部周辺の先住民族資料の理解のために 共同研究：明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動：国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討（2012-2015）」『民博通信』141 号、2013 年 6 月 28 日。
- 【定期刊行物】手塚薫「北海道と千島・樺太」『季刊考古学』125 号、2013 年 11 月。
- 【定期刊行物】長谷川伸三「書評 原暉之編著『日露戦争とサハリン島』」『歴史と経済』第 55 卷 4 号、2013 年 7 月 30 日。
- 【定期刊行物】半谷史郎「書評 今西一編『北東アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』」『社会経済史學』第 79 卷 2 号、2013 年 8 月 25 日。
- 【定期刊行物】福田正宏「北海道とサハリン・千島：日露二国の考古学からみた縄文文化の北辺」『季刊考古学』125 号、2013 年 11 月。
- 【定期刊行物】古道谷朝生、笹倉いる美「木村捷司が描く樺太・オタスの北方民族：その背景と人々(1) 網走市立美術館所蔵作品より」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23 号、2014 年 3 月 20 日。
- 【定期刊行物】プロコーフィエフ M.M.、荻原眞子、古原敏弘「サハリン州郷土博物館における南サハリンアイヌのコレクション：収蔵と研究の歴史から」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』20 号、2014 年 3 月。
- 【定期刊行物】持田誠「北海道立北方民族博物館所蔵田辺尚雄氏資料に含まれる鉄道資料」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23 号、2014 年 3 月 20 日。
- 【定期刊行物】百瀬響「書評と紹介 三木理史著『移住型植民地樺太の形成』」『日本歴史』787 号、2013 年 12 月。
- 【定期刊行物】山下聖美「林芙美子のサハリン紀行(1)「樺太への旅」に描かれるもの」『藝文攷』19 号、2014 年 2 月 15 日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

一研究プロジェクト一

(代表者五十音順)

■朝日祥之 言語学

[最終]朝日祥之(国立国語研究所)「サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性に関する社会言語学的研究」科学研究費補助金・若手研究(B)、2011-2013 年度。

■加藤絢子 先住民史

[最終]加藤絢子(九州大学)「日本統治下のサハリン先住少数民族：戦前・戦後における法的地位の変遷」科学研究費補助金・特別研究員奨励費、2012-2013 年度。

■醍醐龍馬 外交史

[単年]醍醐龍馬(大阪大学)「榎本武揚と日露関係」北海道大学スラブ研究センター「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」、2013 年度。

■兎内勇津流 ロシア中世史

[新規]兎内勇津流(北海道大学)「20 世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶」京都大学地域研究統合情報センター「地域情報学プロジェクト」、2013-2014 年度。

■中山大将 農業社会史

[継続]中山大将(北海道大学)「日本帝国崩壊後の樺太植民地社会の変容解体過程の研究」科学研究費補助金・特別研究員奨励費、2012-2014 年度。

■原暉之 ロシア極東近現代史

[新規]原暉之(北海道大学)「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2013-2016 年度。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

■ 参考資料 非会員による研究プロジェクト

- [最終]大友昌子（中京大学）「東アジアにおける福祉文化的基盤の比較研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2011-2013年。
- [新規]坂根嘉弘（広島大学）「日本帝国圏における戦時農業政策の比較的研究：社会関係に着目した地域分析」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2013-2016年。
- [新規]鈴木建治（北海道大学）「中世・近世アイヌ文化における内耳土鍋の考古学的研究」科学研究費補助金・若手研究(B)、2013-2015年。
- [最終]関根達人（弘前大学）「中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究」科学研究費補助金・若手研究(A)、2010-2013年。
- [最終]辻原万規彦（熊本県立大学）「戦前期日本における製糖業を支えるネットワークの形成過程と特質に関する研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2011-2013年。
- [最終]パイチャゼ スヴェトラナ（北海道大学）「北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2011-2013年。
- [最終]麦倉哲（岩手大学）「岩手県内の樺太引揚げ者のファミリーヒストリー 住宅困窮層の実態と支援の比較研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2011-2013年。
- [継続]柳原正治（九州大学）「近世及び近代の日本における「領域」・「国境」概念に関する統合的研究」科学研究費補助金・若手研究(B)、2011-2014年。
- [新規]山下聖美（日本大学）「林芙美子文学から見る近現代アジア諸国の研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2013-2015年。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

サハリン・樺太史研究会会則

2011 年 5 月 28 日改正

2009 年 5 月 16 日採択

1. 本研究会はサハリン・樺太史研究会と称する。
2. 本研究会は、サハリン・樺太を対象地域とし、主として歴史分野に関する研究の促進と研究者の交流を目的とする。
3. 本研究会は、その目的を達成するために次の事業をおこなう。
 - (1) 定例研究会(例会)・シンポジウムなどの開催。
 - (2) 共同の研究・調査、およびその成果の公開。
 - (3) サハリンの大学・研究機関との交流、情報交換および共同研究の促進。
 - (4) その他本研究会の目的を達成するために適当な事業。
4. 本研究会は、サハリン・樺太の歴史に関心があり、その目的に賛同し、事業に協力する個人の会員からなる。
5. 新年度最初の例会時に総会を開催する。総会は本研究会の最高議決機関であり、総会の議決は原則として出席会員の過半数によって成立する。
6. 本研究会には次の役員をおく。

会長(1名)・副会長(1名)・事務局長(1名)。
- 7.1. 役員選出までは 4 名からなる世話人が研究会の運営にあたる。世話人は役員を互選し、総会の承認を得る。
- 7.2. 新規役員選出は、改選前年度総会において組織される役員推薦委員会が役員候補を推薦し、改選年度総会で選出する。
8. 会長は本研究会を代表し、会務を統括する。
9. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
10. 本研究会に事務局をおく。事務局長は会長・副会長のもとで本研究会の事務全般を担当する。
11. 役員任期は 2 年とする。ただし再任はさまたげない。
12. 本会則は 2009 年 4 月から発効する。本会則の改正は役員協議を経たのち総会の議決による。

サハリン・樺太史研究会役員

2013 年 5 月 25 日選出

会長: 白木沢旭児 (新任)
副会長: 天野尚樹 (新任: 前事務局長)
事務局長: 中山大将 (新任)

=====

サハリン樺太史研究会 2013 年度活動報告書

発行日：2016 年 3 月 31 日

編集者：中山大将

発行者：サハリン樺太史研究会

[公式 HP] <http://sakhlinkarafutohistory.com/home.html>

お問い合わせは、上記 HP の問い合わせフォームよりお願いいたします。

=====